

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 『源氏物語』明石一族物語の研究

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 神原, 勇介, Kanbara, Yusuke<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00002474">https://doi.org/10.57529/00002474</a>  |

本博士論文は、『源氏物語』における物語の筋展開の力学を分析することを通して、作品の性質を明らかにすることを目的とする。とりわけ、作品中でも一際長大な構造と数奇な筋立てが異彩を放つ、明石一族に関わる物語を主たる対象とする。

明石一族の物語の発端は、若紫巻、北山で療養をする光源氏に、従者の良清が語った噂にあった。播磨国の旧国守、明石の入道は、名族の出で、もと近衛中将だったがそれを進んで辞し、任国に下向した末に土着してしまったにもかかわらず、一人娘の結婚に過大な期待をかけて求婚者を寄せ付けない「ひがもの」であるという。この一家が、再び登場するのは須磨巻であった。折しも、光源氏は右大臣、弘徽殿大后ら朱雀帝の外戚一派との政争を逃れて身を隠すため、明石の浦にも程近い摂津国須磨の浦に謫居している最中であつた。これを好機と捉えた入道が、娘明石の君と結縁しようとの魂胆を抱き、明石巻では自身の領地明石の浦に光源氏を招く。このことで、『源氏物語』第一部を貫流し、光源氏亡き後の世界である第三部まで続くこととなる、明石一族と光源氏の関わりを中心に据えた長大な物語展開が、本格的に始発する。この一連の物語の筋展開を、本博士論文では「明石一族物語」と称し、主たる考究の対象とする。

ただし、右のように簡潔に述べられるほど、この物語の形成過程は容易なものではなかったと思量される。元名族とはいえ、土着の豪族風情に身を堕とした入道一家は、『源氏物語』に登場する主要作中人物群の中では、身分の上で最底辺に位置していると言えよう。さらに、畿外に根拠地を持つ地理上の瑕疵も考慮すれば、到底、究極の貴公子たる光源氏の恋の対象や、まして、婚姻の相手になることは考えづらかつたはずである。何かの間違いで両者が相見えることがあつても、行きずりの関係で終わるのが関の山だつたに相違ない。ところが、明石一族物語は光源氏の栄達の軌跡に分ちがたく絡みつき、畿外の地方から出発したはずのこの一族は、最終的に光源氏の領域の中核たる六条院にまで食い込んでいくこととなる。

この筋書きは、ともすれば、現実的な線を逸脱する設定だつたらう。一たび慎重さを欠けば、陳腐な嘘になりかねない。むしろ、『源氏物語』は作り物語ではあるものの、空虚な「そらごと」を是認するようなものではなかつた。作品の同時代読者が属する平安朝の貴族社会の常識や、リアリティに基づいた、精緻な物語展開の積み重ねを屋台骨として存立する、高い強度を誇る虚構であつたらう。筋展開の説得力を担保することは、この作品が成立するうえで必要条件であつたはずである。そのような観点に立つと、明石一族物語の筋立てが形成されていく過程は、他の人物にまつわる筋展開と比べても格段に複雑で、困難を伴うものであつたと考えられる。裏を返せば、そうまでして作品が語り抜いた明石一族物語の作品全体に占める比重は、自ずから重大であつたと推察されることにならう。

如上の明石一族物語の筋展開は、何を力源として、どのように形成されていったのか。そうして形成された筋展開はどのような結論に向かつて進み、語り抜かれた事柄の核心とは何であつたのか。それは『源氏物語』の他の物語の筋展開とどのように関わり、作品全体において如何様に位置付けることが可能なのか。このように、筋展開形成の力源と、筋が進む方向性を見極め、いわば明石一族物語の「物語形成の力学」を分析することで、作品全般の性質を明らかにする。

従来の研究史では、明石一族物語が「如何なる物語であるか」ということが問題とされてきた観がある。これに対して、本博士論文は、明石一族物語が「如何なる力学によって形成されたか」という点の観測に重点を置く。そのために、一見微小に見える文脈の綻びが、その実、作品が種々の制約と切り結んできた痕跡であり、物語展開形成の分水嶺となつていたりある分析を行うこととなる。したがって、本論文では専ら、物語展開上の要所と考えられる場面を起点として考察を行うこととなる。それは、たとえば、停滞気味になつていた筋展開が進展し始める契機と思しき箇所や、一見して不合理、不可解と見える作中人物の言動などが含まれる。そうした箇所を起点に問題を抉出し、各々の場面で物語展開を牽引していく力源、筋が進んでいく方向性を分析する。そうした手続きを積み重ねることによって議論を進め、以下の四篇を以て物語形成の力学を明らかにし、作品の核心に迫る。

第一篇「恋愛譚展開の力学」では、明石巻における光源氏と明石の君の恋愛譚展開の力学について論じた。

第一章「あて」なる明石の入道―明石の入道の性質と光源氏のまなざし―では、明石巻序盤において、入道の人物像が物語展開上に果たした役割について論じた。入道は、若紫巻で最初にその存在が語られる時から、一貫して「ひがもの（偏屈者）」と評される。ところが、明石巻では音楽や和歌、故事先例に通暁する貴族的教養を持つ「あて」なる人物として描かれる。平安朝の他の物語文学作品においては、「ひがもの」と評される作中人物たちは、一様に貴族的教養や文化とは無縁の人物として描かれる。したがって、「あて」という、「ひがもの」の評とは矛盾すると言える入道の性格が描写され始めることの意味は問題となる。入道の「あて」なる性質が、噂でしか知らない明石の君の美質を類推させる要因となり、光源氏が彼女との恋愛に踏み込んでいく契機となっていることを明らかにした。

第二章「明石の入道の代作の手紙―文通始発時における役割をめぐって―」では、明石巻中盤で光源氏から送られた手紙に返事を書くこととしない明石の君を見かねて、父の入道が返事を代筆するに及ぶ展開に着目した。当時の慣行として、私信の代筆は恋文にいたるまで広く行われていた。ただし、父親が娘の艶書を代筆することはかなり異例であった。その不自然さを、恐らくは知悉していながら、入道がこの行動に及んだのは何故だったか。その背景には、明石の君の「結婚拒否」とも言える頑なな姿勢と、二人の縁談に非協力的な周囲の姿勢があったものと思われる。そうした中であって、入道の代筆の手紙は如何なる役割を果たしていたのか。平安時代の手紙代作の諸相を幅広く参照しながら考察した。

第三章「明石巻における明石の入道の引歌―源信明詠の引用が果たした役割をめぐって―」では、文通の開始後、しばらく膠着状態にあった明石の君と光源氏の関係を進展させるべく、入道が源信明の和歌「あたら夜」と花とをなじくはあはれ知れ覽人に見せばや」〔後撰集〕春下一〇三〕の一節を光源氏に言って寄越す場面に着目した。この引歌は研究史上、「ひがもの」の入道による滑稽な所業と見る立場と、光源氏を感嘆させた優れた文化的営為だったとする見解が並存していて、意義が確定されていない。また、物語の場面は秋であり、和歌の本来の部立は春であるため、折を逸脱した「季外れ」の引歌ということになる。その意味は全く問われて来なかった。この引歌に込められた入道の意図はどのようなものだったのか。如何なる要素が光源氏の重い腰を上げさせ、明石の君との逢瀬に駆り立てたのか。一連の物語展開の背景に、光源氏と明石の君、そして入道を含めた三者三様の思惑の交錯があったことを確認し、逢瀬に到る機微を解きほぐした。

明石一族物語の展開の原動力は従来、入道が感得した「月日の瑞夢」や、「住吉神の加護」であると説かれ、平安朝の信仰に裏打ちされた一種の靈験譚として見られることが多かった。本論文では、そうした冥々の力が暗躍する一方、作中人物たちの情念が、紆余曲折を繰り返しながら具体的な筋展開を紡いでいく様相を観察する。明石巻を通して、物語を動かす力源は、作中人物各人の思惑や情念であったと言える。それらが時に一致し、時に反発し合って、複雑に絡み合うことで筋展開が紡ぎ出される。また、貴族的教養、恋文のやり取りの機微、絶妙な引歌など、平安中期当時の貴族社会における文化や風俗が突破口として活用されてもいた。このことは、明石一族物語があくまで現実社会と地続きの話として展開することを目指した証左であると結論づけた。

第二篇「越境」の力学―では、明石一族物語が、その主な舞台を畿外の明石から都西郊の大堰の地、そして光源氏世界の中核である六条院へと移していくことを可能にした力学について論じた。

第一章「明石の入道の遣水転落―明石巻の記事構成と語り―」では、光源氏が朱雀帝に赦免され、都に帰還した後、悲しみにくれた入道が遣水に滑落して病み臥す滑稽な場面に着目した。当該場面は、光源氏に忘れ去られることには疑問を禁じえない。これを考えるうえで重要と思われるのが明石巻の特異な記事構成と語りの妙であった。明石巻の物語は明石と、都を視点が行き来する形で展開し、二地点の出来事の記事が交錯することによって、物語の緊迫感を高める工夫があったと思われる。件の記事も、光源氏が明石を去ることで悲哀と惑乱に苛まれた入道に感情移入しようとする読者の読みを語り手が妨害し、筋展開の先読みを意図的に困難にすることで興味の持続を担保する仕組みになっていた可能性を論じる。その過程で、庭園史研究の知見を援用し、入道が領地に築いた庭園の在り方を推定することも試みた。

第二章「明石の尼君の呼称変化―「尼」の属性と越境の物語―」では、人物呼称の変化と筋展開の連関を考察した。明石一家が大堰に転居する松風巻で、これまで「母君」と称されてきた明石の君の母親が、唐突に「尼君」と呼称され始める。出家の問題が絡むこの呼称変化は見逃せまい。俗人女性と尼には、自ずから社会的位

相に差違がある。女性の出家は夫婦の生活や家事経営などの俗事とは一線を画することを意味し、多くの場合、配偶者との離縁を伴う。明石の尼君も、「ひがもの」の夫に従って地方に淪落していた過去を、出家することで清算した可能性がある。そうすることで明石の君たちとともに上京し、自身が相続していた祖父「中務宮」伝来の大堰山荘の女主人の立場を委譲する意図があったのではないか。また、松風巻の呼称変化が、後の少女巻における明石の君の六条院入りまでを射程に含めた、明石一族が都社会へと「越境」を果すための重要な意義があったことにも言及した。

化外の地である明石から出発した明石一族が、光源氏の栄達の物語に合流していくためには、地方から都へと軸足を移す、いわば「越境」が課題だったものと思量される。それをスムーズに成し遂げるためには、必然性を丹念に積み重ねた筋展開を構築して、読者の関心と支持を保持することが不可欠であったに相違ない。そうした重要局面に、作品が如何に対処して明石一族の「越境」を成功させたかを見極める。物語は、その難題を正面から受け止めつつ、時に語りの妙によって読者を攪乱し、また時には作中人物たちに多大な犠牲を払わせることで、この難所を乗り切ったと言える。そうして紡がれた物語展開の中で、明石の君が都社会への「越境」を見事に成功させながら、光源氏の妻妾集団における「その他大勢」の一角に甘んじることが、遂になかった事実は重要である。明石一族は、掌中の珠たる明石の姫君を手放す痛手を負ったのと引き換えに、光源氏が目指した家中の秩序に飲み込み尽されてしまうことなく、独立した地位を確立したのである。こうして墨守された独自の地位は、瑞夢の開示によって明石一族物語の核心部分が明らかとなる、物語の掉尾へと到る糸口となっていると結論付けた。

第三篇「人生儀礼の力学」では、平安貴族社会における人生儀礼の位相に着目し、主として儀礼の持つ、人間関係構築の機能を物語が取り込み、筋展開牽引の力学を形成していく様相を論じた。

第一章「門分かれたる」藤原氏公卿―『紫式部日記』土御門第行幸記事における奏慶の記述―では、寛弘五年（一〇〇八）十月十一日に行われた一条天皇による藤原道長私邸土御門第への行幸の際、中宮彰子所生の皇子敦成に親王宣下が行われた旨の記述に着目した。親王宣下の際には、新親王の外戚氏族の公卿・殿上人一同が御礼言上と拝舞を行う「奏慶」という作法があった。『紫式部日記』当該記事では、藤原氏であるにも関わらず奏慶に加わらなかつた人物がいたと記されているが、これは他の記録に見られない事実であった。

「奏慶拒否」の藤原氏公卿とは一体誰だったか。この行幸自体、道長政権が外孫敦成の誕生によって不動のものになったことを貴族社会に宣言する意味があったものと思われる。したがって、忸怩たる思いを抱えながら行幸に供奉した道長のライバル達は多かつたに相違ない。中でも、かつて政敵として道長と鋭く対立した中関白家の貴公子、藤原隆家が「奏慶拒否」の人物だった公算が高いことを論じた。

第二章「放出（はなちいで）」の再検討―儀礼の場・生活の場―では、平安時代の貴族邸宅に特有の「放出」なる部屋の諸相を考証した。この部屋は、梅枝巻、明石の姫君の裳着の式場として登場する。その実態は必ずしも明らかではないが、専ら、儀式の式場や客座にするために臨時に設ける空間と見る把握が一般的である。具体的な部屋のあり様については、中世以来、母屋に設けるとする説、廂に設けるとする説、また、母屋と廂の間仕切りを取り払った場所を言うとする説などが提出されている。従来、「放出」の考証では、物語作品の用例が重視され、古記録に見える事例は等閑視されてきた。これまで議論の俎上に上らなかつた諸史料の分析から、「放出」の実態や用途などの一端を明らかにする。また、梅枝巻の「放出」の物語における意義にも言及し、次章の考察の礎とした。

第三章「明石の姫君の裳着―秋好中宮による腰結の意義―」では、梅枝巻に語られる姫君の裳着の儀において、秋好中宮が腰結を務めたことを問題とした。裳着の腰結は、ふつう父親か、親族中の高位者が務めることが多い。秋好のように、当帝中宮が臣下の腰結を務めるのは、作品中にも史実にも見当たらない異例のことであった。異例を嫌う貴族社会の気風に反するかのごとき人選に拘った光源氏の狙いを問う。実は、史実には中宮が腰結をした事例こそないものの、男子の成人の儀たる「元服」で、天皇が臣下の加冠役を務めた例は僅かに見出せる。光源氏の人選には、その史実を下敷きに、独自の趣向を凝らして物語展開の力源とする、作品による「准拠」の手法が施されていたと考えられる。光源氏の采配が、裳着の直後に予定されていた姫君の東宮入内に際して重大な役割を果たしていたことを指摘する。その一方で、姫君の養母として重要な役割を果たしてきた紫の上の地位と、彼女を中心とした六条院世界全体の動揺がこの場面に暗示されていた可能性にも言及した。

明石一族物語では、実母のもとを離れて紫の上に養育されることになる明石の姫君を取り巻く人間関係の仮構と、その挫折の筋展開に、人生儀礼が効果的に利用されている。そのことを明らかにするうえで、平安朝の実社会における人生儀礼の諸相を立体的に把握しておくことが不可欠であるため、作品内外を往還する議論を展開した。『源氏物語』の同時代作品である『紫式部日記』に描かれた儀礼を参照し、また、儀礼の会場としてよく用いられる「放出」なる貴族邸宅内の空間を考証したうえで、『源氏物語』の明石の姫君の成人の儀である「裳着」の意義を論じた。化外の地に出生した劣り腹の女子の立后という明石一族物語の虚構は、貴族社会における儀礼の力を援用して成り立ち得たのであった。一方、筋展開の方向性の点で重要と思われるのは、裳着という人生儀礼が、養母の紫の上の存在価値の低下をも浮き彫りにしている点である。紫の上と、彼女を中心として構築された六条院世界の動揺がここに暗示されていた。この事実は、姫君と引き離されている明石一族が、第二部早々の若菜上巻に到って息を吹き返す端緒にもなっていたと結論付けた。

第四篇「女系繁栄譚」の力学」では、明石一族物語全体を「女系繁栄譚」という観点から解釈し直すことを目指した。そのために、明石一族物語を主として担う作中人物、入道・明石の君父娘の、それぞれの人物造型を切り口に、物語を展開させる力学を分析した。また、入道が感得した「月日の瑞夢」が開示される場面の考察を通じて、「女系繁栄譚」としての明石一族物語の核心に迫った。

第一章「明石の入道の人物像——ひがもの」という性質の再検討」では、入道の人物造型と物語展開との関わりを検討した。作品中一貫して「ひがもの（偏屈者）」と評される入道の性質は、若菜上巻で明石一族の宿運に深く関わる「月日の瑞夢」が開示される伏線として見られることが多い。ただし、入道の「ひがもの」の性格は若年のころから具備していた性質であるとも語られる。その場合、単に伏線として読む把握は成り立たないことになる。入道が元来持っていた「ひがもの」の性格と、瑞夢が秘匿されたことで生じた「ひがもの」の印象は分けて考えるべきだろう。そのうえで、前者の物語展開上の意義を考えて見なければならぬ。察するに、その性格は、作品中一際奇な運命を持つこの一族にとって、重要な資質だったのである。瑞夢の成就のためには、暗示的で明瞭さを欠く内容を精確に解釈し、独自の努力を続ける必要があった。ふつうの平安貴族ではおよそ案出し得ない奇抜な方途に邁進する原動力として、「ひがもの」の性格付けが明石一族物語全体を牽引している様相を浮き彫りにする。

第二章「明石の君と「童女」——須磨巻末の天変と、明石物語の源泉——」では、須磨巻末の嵐の夜に夢枕に立った異形の者を、光源氏が「海の中の童女」の眷属と推断したことに着目した。研究史上、この異形の怪人は住吉神の使いとして光源氏に働きかけ、また、明石巻の物語を『古事記』・『日本書紀』に見える「海幸山幸神話」になぞらえる読み方を可能にすると説かれがちだった。ただし、光源氏の脳裏をよぎった「童女」なる語彙は神話のテキストには全く見られない。神話を念頭に置いたうえで、「童女」なる表現が喚起する固有のイメージを掘り起こす必要もあると思われる。元来、「童女」という語は仏教のイメージを強く持つ。仏典には、「童王」と、その娘である「童女」が活躍するものが散見される。『法華経』提婆達多品や、『海竜王経』などがその類である。これら、仏典の「童女」たちの話も、「海幸山幸神話」に登場する豊玉姫と同様に、入道と明石の君父娘が担う「女系繁栄」の物語の骨格形成に寄与していることを明らかにした。

第三章「女系繁栄譚としての明石一族物語——ものの違ひ目」の再検討を起点に——」では、入道の父大臣が関わり、一族没落の原因になったとされる「ものの違ひ目」の噂について分析した。この噂は従来、明石一族物語前史を理解するうえで重要な情報源と目されてきた。一方で、その曖昧な表現ゆえに「違ひ目」の内実特定は困難であり、だからこそ様々な解釈が並存してきた。ところが、作品の文脈を精読すれば、噂に語られるあり方と、これまでに所々で語られてきた父大臣の印象に齟齬が生じていることがわかる。だから、噂はあくまで噂に過ぎず、前史復元の材料としては信憑性に欠けることを指摘する。むしろ、「違ひ目」なる表現が持つ曖昧さは、史実を参照させる准拠読みを誘発する点において重要だったのではないか。そうして喚起される史実との比較により、崇高な瑞夢の裏付けによって、明石一族物語が史実を越えた伝説として荘厳される仕組みになっていたと解釈する。加えて、家族史研究の知見を援用し、光源氏が不義の子冷泉帝に抱いた自身の男系皇統創出の宿願を、瑞夢によって強固に結びつけられた明石の女系子孫たちが妨げていくことから、明石一族物語の本質が、「男系原理」の光源氏の物語と鋭く衝突する「女系繁栄譚」であったことを明らかにした。

世人に非難された入道の「ひがもの」という性格は、瑞夢を実現に導き、物語展開を牽引する重要な資質であった。また、明石の君の人物造型に影を落とす「童女」の存在も、物語の筋展開を規定していた。神話や仏

典の「童女」の物語からは、出自の負性と優れた資質を併せ持つ女性の葛藤の系譜が浮かび上がってくる。その末流に位置付けられた明石の君が、平安朝の社会を生きる一人の人間として、その苦悩と如何様に向き合い、どのような答えを見つけていくか。それが明石一族物語を支える重要な支柱の一つであった。そして、瑞夢は、明石一族物語を、凡百の成功譚とは一線を画する「女系繁栄譚」として総括し、荘厳する役割を担っていたと結論付けた。

明石一族物語が語り抜いた核心を「女系繁栄」のテーマにあったと考えてみると、男性が官職秩序の論理や、男系原理による「家門」の論理に捕らわれることなく活路を見出し、また、女性が社会や妻妾集団における独自の地位を突き詰めて自己の立場を模索していく話と、物語全体を読み変えられた。これらの物語が一体不可分に展開された明石一族物語は、平安貴族社会における落伍者が、虚構作品にのみ許される独自の道筋を辿り、固有の価値観を創出することで自身の尊厳を回復するに至る物語である、と評せるものと結論付けた。こうした明石一族物語の核心は、作品中の他の筋展開と切り結び、『源氏物語』全体の持つ複雑な妙味を引き立てているのである。